



TITLE:

資本主義経済の発展段階 - 『経済学から歴史学へ』の補足(一) -

AUTHOR(S):

堀江, 英一

CITATION:

堀江, 英一. 資本主義経済の発展段階 - 『経済学から歴史学へ』の補足(一) -. 経済論叢 1958, 81(4): 203-221

ISSUE DATE:

1958-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/132612>

RIGHT:

經濟論叢

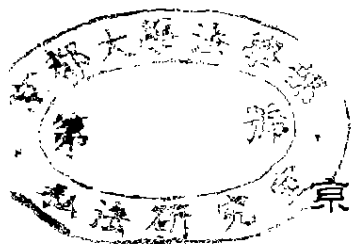
第八十一卷 第四號

資本主義經濟の發展段階……………堀 江 英 一 1

創造的世界經濟學の世界史的基礎(二)
……………石 川 興 二 18

日本におけるメキシコドルの流入とその功罪(二)
……………小 野 一 一 郎 34

技術革新と生産規模……………山 田 保 53



昭和三十三年四月

京大經濟學會

資本主義經濟の發展段階

——『經濟学から歴史学へ』の補足(一)——

堀 江 英 一

第一節 問 題

わたしは、最近公刊した『經濟学から歴史学へ』(有斐閣)のなかで、マルクス主義經濟学のなかで資本主義經濟發展についての具体的な理論が成立してくる過程を説明した。その要点はつぎの通りである。

一 マルクスは、『資本論』のなかで、資本主義經濟の構造理論から資本主義經濟の發展理論——單純商品經濟・小親方・單純協業・マニファクチュア・工場という發展順序をみちびきだした。マルクスの發展理論の基準となっているものは、それが叙述されている場所からあきらかなように、『資本の生産過程』とくに剰余価値の生産である。だから、マルクスの發展理論は資本主義的「生産」の發展順序についての理論である。

二 レーニンは、『發展』のなかで、マルクスの資本主義的「生産」の發展理論を整理して、小營業段階(單純商品經濟・親方・單純協業)・資本主義的マニファクチュアおよび資本主義的家内労働段階・機械制大工業段階(工場)という資本主義的「生産」の發展段階理論を完成するとともに、さらに重要なことには、『資本の生産過

程』の基準からの発展段階理論を国内市場の発展と結合して具体化した。こうして資本主義経済の発展理論は『資本の生産過程』と『資本の流通過程』の両側面からとらえられることになった。こうして、わたしたちは資本主義経済のそれぞれの発展段階における「生産」と「市場」との規定を知ることができるようになった。『発展』のもつ第一の独自性はここにある。わたしたちはここに市場と市場構造との研究について最良の典拠をみることができ

る。

註 いき書いたように、レーニンはマルクスの単純商品経済・小親方・単純協業という発展順序を小営業または小商品経済という資本主義発展の第一段階に一括した（『発展』第五章参照）。それは『資本論』にその根拠があり、レーニンはそれにしたがったのである。小親方について、『資本論』は「資本家と労働者との中間物……にすぎない。ある特定高度の資本制的生産は、資本家が全時間を他人の労働の取得、したがってまた統制のために、およびこの労働の生産物の販売のために、ふり向けることを条件とする」（青木文庫版第二冊五二二頁・岩波文庫版第二冊三〇〇頁——第一部第三篇第九章）と述べ、小親方経営が秘密な意味での「資本制的生産」でないことをあきらかにしている。また単純「協業そのものは、個々別々の独立労働者あるいは小親方の生産過程に対立する資本制的生産過程の独立的形態として現象する」が、「資本制的生産様式のある特殊の発展時代の固定的・特徴的な形態をなすものではない」（青木文庫版第二冊五六一頁・岩波文庫版第三冊四六—七頁——第一部第四篇第一章）。こうして、小親方と単純協業とは、資本主義的生産の発展段階としては、単純商品経済と一括して、小営業または小商品経済の段階とするのが適當であるということになる。

三 レーニンは、こうして、小営業・資本主義的マニファクチュアおよび資本主義的家内労働・機械制大工業という資本主義経済の発展段階理論を確立したが、この発展段階理論は全体の経済発展から資本主義的諸要素だけを抽象し、しかもこうして抽象された資本主義的諸要素のうちの最高の要素によって段階を設定し他の要素を捨象した、いわば「波頭の理論」である。だから、発展段階理論は二つの捨象——先資本主義的諸要素とあぐれた資本

主義的諸要素との捨象のうゑで設定された抽象的な發展段階理論である。そこで、機械制大工業が支配的である段階のロシア十九世紀の具体的なロシアの經濟構造をあきらかにするために、レーニンは、かれの『發展』のなかで、機械制大工業のほかに資本主義的マニユファクチュアおよび資本主義的家内労働、さらに小營業が同時に並存すること、同時並存しながらも小營業→資本主義的マニユファクチュアおよび資本主義的家内労働→機械制大工業という發展が日々進行していること、具体的な機械制大工業段階の經濟構造はこうした複合体であることを、あきらかにした。レーニンは、「波頭の理論」である發展段階理論を全体の經濟構造のための理論に転用した。こうしてレーニンが十九世紀末のロシア經濟では機械制大工業段階に達しているというとき、その機械制大工業段階なるものはいままで説明してきた發展段階理論の抽象性を克服した具体的な經濟構造をさしているのである。『發展』のもつ第二の独自性はここにある。

こうした経過をわたしは『經濟学から歴史学へ』のなかで説明したつもりである。そこでこういう問題がうまれてくる——發展段階理論をレーニンの理論段階にまで具体化する場合、小營業段階、資本主義的マニユファクチュアおよび資本主義的家内労働段階、機械制大工業段階のそれぞれの全体的經濟構造はどのようになっているのであろうか。わたしたちは、レーニンが機械制大工業段階について行った全經濟構造的把握を、それ以前の段階についても行われなければならない。わたしは、『經濟学から歴史学へ』のなかでその必要を示唆しただけで、それを行わなかった。ここでは、それについて簡単に指摘したい。

第二節 資本主義の三つの發展段階

わたしたちはこの問題を一義的に解決できない。まず第一に、同じ段階たとえば機械制大工業段階であっても、その全体の經濟構造は国によってかなりちがっているはずである。第二に、同じ国の同じ段階の經濟構造であっても、その段階を構成する期間のうちに發展があり變化があるはずである。

だから、この問題は国と時期とにしたがつて具体的に解決されなければならない具体的な問題であるということになる。だがそれにもかかわらず、資本主義の發展に法則性があり、その法則性が貫徹するとするならば、資本主義經濟のある發展段階の全体の經濟構造には一定の特徴があるはずであり、その特徴をあきらかにできるはずである。わたしはここではイギリスをとりあつた『資本論』とロシアをとりあつた『發展』とから摘記して、『發展』の方法にしたがつてそれを整理し構成しなおしてみよう。これはあくまで『發展』の方法をあきらかにし理解しやすくするためであつて、具体的分析にとってかえようとするものではない。マルクス主義はただしい方法を要求するが、方法が具体的分析にとってかわることこそを峻拒するものだからである。

一 小營業段階

『資本論』の叙述の順序にしたがつて、小營業段階が位置する經濟構造の特徴を説明しよう。『資本論』の叙述の順序が抽象から具体への上向方法であるからには、わたしの説明は捨象された諸要因を復元して具体的な經濟構造の特徴をあきらかにできるはずである。

一 資本主義經濟の抽象的な發展段階としての小營業は、さきに述べたように、單純商品經濟・小親方・單純協業の三者をふくんでおり、したがつてそれらの歴史的特質は『資本論』の第一部の『第一篇 商品と貨幣』・『第三篇

絶対的剰余価値の生産』・第四篇『第一章 協業』を發展理論として理解することによってあきらかとなる（『經濟學から歴史學へ』第二章第二節一・二・三・四。なお『發展』第五章一・二・三・四・五参照）。それを要約するならば、つぎのようになる。

單純商品經營 勞働力と生産手段との自然的療着に立脚する獨立生産者が社会的分業關係にくみこまれ、そこではすでに価値法則が支配している形態である。

小親方 單純商品經濟をいとなむ獨立生産者が部分的に資本主義的分解をはじめ、小親方は生産手段を集積して大部分家族勞働で一部分賃勞働でこれを経営する小資本家であり、したがって他方には多くの獨立生産者は部分的に生産手段をうしない家族經營ばかりでなく賃勞働を放出する。單純商品經濟の分解形態である。

單純協業 獨立生産者の資本主義的分解がさらに進展して、單純協業つまり初期マニファクチュアはさきに引用した「特定高度の資本制的生産」を営んでいるが、それはまだ組織的な（分業による）集團的生産力『社会的勞働過程によってささえられておらず、したがって散発的である。』「資本制的生産」はこうしたつましいめだたない姿で世の中にあらわれてくる。

小營業または小商品經濟段階はこの三者をふくみ並存させているが、この小營業者または小商品生産者は大部分分解過程にある農民大衆である。マルクスは、『資本論』第一部『第二章 いわゆる本源的蓄積』のなかで、こうした農民大衆の歴史的成立を説明して、「イギリスでは農奴制が十四世紀の終頃にはすでに事実上消滅していた。人口の大多數は、当時には、また十五世紀にはさらに一そう自由で自營の農民……から成立っていた。……かような事情は、十五世紀を特色づける都市の繁榮と相まって、かの大法官フォートスキューがその著『イギリス法の讚

美』で雄弁に描寫してゐるような人民的富を可能ならしめたが、しかし資本家的富を排除したのである」(青木文庫版第四冊一〇九六—七頁・岩波文庫版第四冊二七一—二頁)と述べて、これを農奴制の消滅、貨幣地代の成立とともに成立する「民富」とよんでいるが、さらに第三部『第四七章 資本制地代の發生史』のなかで、この貨幣地代成立の歴史的前提を説明して、「それは……諸生産物の市場價格を、および、諸生産物が多かれ少かれほぼ価値どおりに売られることを——従來の(地代：筆者)諸形態のもとではそんなことは決して必要でない——前提とする」(青木文庫版第一三冊一一二三頁・岩波文庫版第一一冊三二〇頁)と述べている。価値法則の支配が單純商品經濟の本質的規定である以上、わたしたちは小營業段階の成立を十四世紀末の貨幣地代の成立と関連させなければならない。小營業段階の終期をさめることは容易である——それは本来的マニユファクチュア時代のはじまる十六世紀中葉(青木文庫版第三冊五六三頁・岩波文庫版第三冊四八頁—第一部第二章)である。こうしてイギリスではほぼ十四世紀末から十六世紀中葉までが小營業段階ということになる。

註 『資本論』が利用している史実は十九世紀六〇年代までの研究にしたがっており、したがってその後の研究による史実によって事態はかわてくつる。だが、ここでは『資本論』に述べられた史実にしたがひ、その後の新しい研究の發展を考へないことにする。

二 マルクスは、小營業段階の市場構造については、特別になにも述べることができなかった。商人資本・高利資本のいわゆる前期的資本の理論的前提は第一部『第一篇 商品と貨幣』の『第三章 貨幣または商品流通』の『第三節 貨幣』——価値一般の結晶としての「貨幣としての貨幣」のところであたえられており、その歴史的意義は第三部の『第二〇章 商人資本に関する歴史的考察』と『第三六章 先資本制的なもの』とのなかで説明されて

いる。わたしはそれをさきに簡単に説明したが（『経済学から歴史学へ』第三章第二節二）、もう一度要約してみよう。商人資本・高利資本の前期的資本は、商品経済を前提するだけであり従って単純商品経済は必然的にそれをうみだすこと、商品生産を促進しその市場を拡大すること、旧生産様式を分解して自立的貨幣財産を集積すること——要するに資本主義の歴史的前提をつくるが、これらの歴史的前提が現実には資本主義の生産に転化するためには、『歴史的発展段階、および、これによってあたえられる諸事情』（青木文庫版第一冊八三九頁・岩波文庫版第一〇冊四四四頁—第三部第三六章）すなわち生産手段をうばわれた独立生産者が奴隷や農奴に転落しないで賃労働者に転化するだけの人格的独立を保証する経済的条件の発展を必要とする。遺稿『資本主義的生産に先行する諸形態』はまさしくこれを問題としているのである。ここから、農奴制の消滅と関連する小営業段階がこの転化条件をみたしているものと、マルクスが考えているとみなければならぬ。だからマルクスは商人または高利貸による独立生産者の「この擄取形態は、中世後期におけるごとく、資本制的生産様式への過渡を形成しうる」（青木文庫版第三冊八〇六頁・岩波文庫版第三冊三八頁—第一部第四章）と述べているのである。

レーニンは、『発展』のなかの小営業段階を説明した『第五章 工業における資本主義の最初の諸段階』の六を『小営業における商業資本』の説明にあてて、小営業段階の市場構造を説明している。レーニンにとっては、マルクスのように商業資本・高利資本が資本主義的生産の歴史的前提となるための条件を問題とする必要はなかった。レーニンは十九世紀末のロシア経済を構成する一つの要素としての小営業段階を問題としているのであるから、そこでの商品生産および商業資本ははじめから資本主義経済の枠のうちにあるものである。レーニンは、商業資本が農民層の分解から生じ小営業と結合しそれと同一性をもっていること、この商業資本の本質的機能が小生産者

の細分性と市場の拡大との不釣合を克服する純經濟的機能であり、したがってこのときの商業利潤が單なる策略といわゆる讓渡利潤からばかりでなくこの純經濟的機能から生ずるものであること、とくに商業資本が小生産者を從屬させて「事実上の産業資本」として資本主義的家内労働を支配するにいたる有名な五段階——全体としてこの段階の商業資本の資本主義的性格を、あきらかにしている。

だが、マルクスもレーニンも小營業という生産過程から段階を規定しているのであって、商人資本や高利資本から段階規定をしなかった。マルクスはこれらの資本による小生産者の從屬たる「中間諸形態については、それらを指摘するだけである」（青木文庫版第二冊八〇五頁・岩波文庫版三三八頁―第一部第一章）といって、抽象的な發展段階規定から捨象した。

三 マルクスは、さきに述べたように、イギリスの小營業段階の成立を十四世紀末の農奴制の消滅、貨幣地代の全面的成立に關連させているが、それならば小營業と封建的生産様式との關係はどうなるのであろうか。

小營業は一般的には「農業との結合」を特徴としており、したがって小營業の發展は農民的商品經濟——いわゆる「民富」の發展を意味している。こうした農民的商品經濟の發展こそ貨幣地代の成立——いわゆる「地代の金納化」の原動力であり、また「地代の金納化」の直接的結果でもあった。

だが、十三世紀にはイギリスで部分的に、十六世紀には東ヨーロッパで農民的商品經濟はかえってグーツヘルンヤクトを展開させ封建的土地所有を強化しさえした。イギリスの場合、それは十三世紀とくに十四世紀末には貨幣地代を成立させた。小營業の成立と發展は封建的土地所有をあるときには強化し、あるときには弱化させるのであるが、イギリスのように貨幣地代を成立させた場合にも、それは封建的土地所有を排除したのではない。これまで

「直接的強制」・「穀」の力で農奴として領主に労働地代を支払っていた隷農は、農奴から解放されながらも、封建地代を買いとった地代概念としてのヨーマンを除いては、慣行小作人・登録小作人として領主に封建地代としての貨幣地代を支払い領主裁判所に支配されていたのである。だから農民は、領主との関係からみれば封建的土地所有に從属する封建農民であり、かれら相互の関係からみれば小營業關係にむすばれた農民である——貨幣地代を支払う封建農民の間に、資本主義的生産關係がめばえつつあるのである。農民はこうした二重の關係にあるのであり、農民の間の資本主義的生産の萌芽はまだ領主と農民との封建的生産關係の一般的支配のもとにあった。小營業段階という發展段階の抽象性は、それが支配的生産様式たる封建的生産様式を捨象して構成されているところにあり、『資本論』は第三部の『第四十七章 資本制的地代の發生史』のなかでそれを復元している。封建的生産關係は前期的資本や共同体のなかにあるのでなく、土地所有關係のなかにある。

小營業段階の經濟構造は封建的生産關係——封建的土地所有の一般的支配のもとにおける資本主義的生産關係の萌芽といふことである。だから、ここでは封建的土地所有者と小商品生産者としての農民との対立が基本矛盾であり、農民相互の資本主義的対立は從属矛盾としてまだ萌芽のなかにあった。いわゆる絶対王政の形成はこの新しい資本主義的生産關係を利用する封建制の政治的再編成である。

二 資本主義的マニユファクチュアおよび資本主義的家内労働段階

つぎに、マニユファクチュア段階の經濟構造を説明しよう。

一 本来的マニユファクチュアは分業という組織的な集團的生産力——社会的労働過程に立脚する資本主義生産形

態であつて、「それは、大ざっぱにいつて十六世紀の中葉から十八世紀の最後の三分の一期にいたる本来的マニユファクチュア時代のあいだ、資本制の生産過程の特徴的形態として支配的に行われる」(青木文庫版第三冊五六三頁・岩波文庫版第三冊四八頁―第一部第二章)。

このようにマルクスはイギリスのマニユファクチュア段階を確定しているが、この時期にマニユファクチュアが生産の支配的形態であつたわけではない。いまの引用文のなかで、マルクスは本来的マニユファクチュアが「資本制の生産過程の特徴的形態として支配的に行われる」と述べているが、ここで「資本制の生産過程」といつているのは、さきに述べたように、資本家を肉体的労働から解放する程度以上の賃労働者群をもつ資本主義的生産過程――ここでは単純協業・本来的マニユファクチュアであり、したがつて単純協業とくらべて本来的マニユファクチュアが「支配的に行われる」ならば、マニユファクチュア段階は成立する。「本来的マニユファクチュア段階」の「本来的」とは単純協業から「分業にもとづく協業」を区別する形容詞である。こうしてマニユファクチュア段階を成立せしめる指標はあくまで本来的マニユファクチュア――いわゆる集中的マニユファクチュアであつて、それ以外のものではない(とくに『資本論』第一部第四章参照)。だが、マニユファクチュア段階では、本来的マニユファクチュアは全体の生産を支配していないことを意味する――マルクスは「マニユファクチュアは、社会的生産をその全範囲において捉えることも、その深部において変革することもできなかった。マニユファクチュアは、都市手工業と農村家内工業との広汎な基礎のうえに、經濟的作品としてそびえ立った」(青木文庫版第三冊六〇九頁・岩波文庫版第三冊二〇三頁―第一部第二章)と述べている。

こうしてマニユファクチュア段階とは、同時に並存する「都市手工業と農村家内工業」――小営業と比較すれば

本来のマニファクチュアの生産は量的に劣り、単純協業とくらべれば本来のマニファクチュアが優勢である時代ということになる。マニファクチュア段階には、その資本主義的経済構造は小営業の広汎な基礎のうえに本来のマニファクチュアがそびえたつという重層的構造をもっているが、それでも本来のマニファクチュアのなかにハッキリした資本主義的生産関係の形態をもつにいたっている。マニファクチュア段階という概念はそうしたもののなかから本来のマニファクチュアを抽出してつくられたものである。

二 本来のマニファクチュアが小営業の広汎な基礎のうえにそびえ立つ経済的作品であるとするならば、マニファクチュア段階の資本主義的構造は小営業と本来のマニファクチュアとの複合体であるということになる。ここから二つの重要な結論がでてくる。

その一つは、マニファクチュア的分業が作業過程を細分し専門化し自立せしめることによって、本来のマニファクチュアは社会的分業さらには地域的分業を發展させるとともに、商工業を農業から部分的ながら分離させて商工業都市および商工業村落を形成させる。これはわたしたちがマニファクチュア段階をやる簡単な指標であるとともに、新しい資本主義的生産関係は商工業都市および商工業村落のなかに自分の拠点をもつこととなり、それによつて資本主義は一つの統一体となることのできる（『資本論』第一部第二章・『発展』第六章四参照）。

その二に、本来のマニファクチュアはその広汎な基礎をなしている小営業を、買占資本として原料を販売し掛売りまた製品を買占し、さらに事実上の産業資本として原材料ときには道具を支給して加工賃で製品をつくらせて小営業者を事実上の賃労働者に転化させることである。マニファクチュア経営者がこうした買占人かねること、さらに龐大な資本主義的家内労働者をつかうこと——産業資本と商業資本とのこうした結合の仕方はマニ

ファクチュア段階の特徵的現象である（『發展』第六章六・七参照）。レーニンはマニュファクチュア段階における本来的マニュファクチュアと小營業の重層性をこのように連関づけている。レーニンはここに着目して、マルクスの本来的マニュファクチュア段階を、「資本主義的マニュファクチュアおよび資本主義的家内労働」段階となづけた。マニュファクチュア段階の資本主義的構造は、本来的マニュファクチュアが商工業的都市または村落を拠点として周辺の農民の小營業を支配する組織である。資本主義的生産様式はここではすでに統一体になっている。

三 さて、レーニンは、マニュファクチュア段階における資本主義的家内労働のこうした普及についての二つの条件をあげている。第一は分与地への農民の緊縛——もし広くいえば農民が土地を保有（所有）して独立經營をいとなむことであり、第二は農民層の分解である——没落層が資本主義的家内労働に従事し上昇層がかれらに仕事をたず代理人 *Zwischenmeister* になる（『發展』第六章七参照）。

こうして資本主義的家内労働普及の經濟的基盤は封建的生産關係のもとにある農民層の分解ということになる。こうした農民層の分解は、小營業段階のところで説明したように、封建的土地所有のもとの新しいブルジョアの現象として起ることができる。だから、本来的マニュファクチュア段階は封建的生産關係のなかでの資本主義經營としておこった。

さきに述べたように、イギリスのマニュファクチュア段階は十六世紀中葉から十八世紀の最後の三分の一期までの期間である。それにさきだつて十五世紀の最後の三分の一期から、封建的土地所有者による牧羊囲込運動がはじまり、慣習小作人・登録小作人は土地をうばわれてプロレタリアになり、この運動がきたるべきマニュファクチュア段階を用意した。この囲込運動は領主が慣習小作人・登録小作人を清掃して封建的土地所有を解体する方法であ

るが、このいわゆる牧羊囲込はいわれるほど規模の大きなものではなく、したがって慣習小作人・登録小作人は広く存在した。またイギリス革命は封建的土地所有者にこれらの小作人を土地から追放する権利をあたえたが、かれらが完全に権利を行使できるだけの技術的基礎がなかった。イギリス農村では、封建的土地所有は、上から徐々に解体されていったが、その完全な解体は十八世紀六〇年代にはじまる第二次囲込運動にまたねばならなかった。

二〇〇年にわたるイギリスのマニファクチュア段階の経済構造はつぎのように要約できよう——

一方では、封建的生産関係は領主—慣習—登録小作人関係として弱まりながら広く存在した。領主みずから囲込によつてこれを次第に解体していった。他方では、新しい資本主義的生産関係は、工業では本来のマニファクチュアが商工業都市を拠点として周辺の農民的小営業を支配し、農業では囲込地に資本主義的借地農業が、慣習—登録小作人を追放しながら進展していった。

一般的にいつて、資本主義的生産関係が商工業都市を拠点とし、しかも全国的市場網によつて相互に結合した統一体にまで発展し、したがつて資本主義的矛盾も顕在化してきた。だが、それは、革命後のイギリスなどをのぞいて、まだ従属矛盾であつて、それらは基本的には封建的生産関係に掩われそれと対立していた。ここでは資本主義的矛盾はこの基本矛盾解決の一環としての役割をはたすこととなる。イギリス革命・フランス大革命などの古典的市民革命はこのことを明証している（堀江英一編『市民革命の理論』第六章参照）。

三 機械制大工業段階

これについては、機械制大工業段階たる十九世紀末のロシア経済を研究した『発展』があり、わたしたちはここ

から直接に方法をまなぶことができる。わたしは簡単にすましてよい。

一 機械制大工業——工場は、資本主義的生産を道具に立脚する協業・分業などの人間労働の主観的組織から解放して、協業・分業をそれぞれの要因として内包する機械的な客観的組織に転形した。機械制大工業——工場は資本主義的生産としての最後の原理をふくんでいる。産業革命はこの機械制大工業——工場の成立過程をさしているが、イギリスではそれはマニファクチュア段階が終る十八世紀の最後の三分の一期から一八三〇年代に進行する。

機械制大工業段階はマニファクチュア段階とは本質的に異っている。マニファクチュア段階では本来のマニファクチュアは封建的社会構成体の部分構成はすぎないが、機械制大工業段階では、機械制大工業、さらにイギリスでは近代的大農業は社会的生産の圧倒的部分をとらえ、したがって資本主義的生産様式が社会的生産を支配する資本主義的社会構成体が成立する。産業革命とはまたこの資本主義的社会構成体の形成過程である。

だが、資本主義的社会構成体が成立したからといって、機械制大生産だけが存在するようになったわけではない。マルクスは、イギリスについて「イギリスでは、経済的編制からみた近代的社会が最も広汎・最も典型的に発展していることは争うべくもない。とはいえ、この国ですら、この階級的編制は純粹には現われない。この国でも（農村では都市でよりも比較にならぬほど僅かだとはいえ）中間——および過渡諸段階が、いたるところで限界諸規定を隠蔽している」（『青木文庫版第一三冊一二四五頁・岩波文庫版第一一冊四五二頁——第三部第五章）と述べているし、また『資本論』第一部『第三章 機械と大工業』の『第八節 大工業によるマニファクチュア、手工業、および家内労働の変革』のなかで、機械制大工業が支配するそのイギリスにおける中間的・過渡的諸段階がくわしく説明されている。レーニンの小營業段階・マニファクチュア段階が機械制大工業段階のロシア經濟の部分構成（ツァル、イド）の規定で

あることについては、なんども説明した。

二　ところで、封建的生産様式はどうなったのであろうか。

マルクスは、イギリスでは中間Ⅱおよび過渡諸段階は「農村では都市でよりも比較にならぬほど僅かだ」と述べている。産業革命の一環としてはじまった農業革命は領地から独立農民をほとんど清掃して資本主義的借地大農業を代置したが、それとともに封建的土地所有は近代的土地所有に転形し、封建的土地所有が存在する余地はなくなった。

ロシアでは、「発展」がくわしく説明しているように、農業は封建的地主・農民双方から著しく資本主義化しつつあったが、それでも封建的生産様式は雇役制度として広く残った。だが、レーニンは、『発展』がそのための経済的分析の役割をはたした一九〇三年の『ロシア社会民主労働党綱領』のなかで、「ロシアでは、資本主義はすでに支配的な生産様式になっているが、まだ、地主、国家あるいは国家首長への勤労大衆の隷属的隷属に基礎をおく、わが国の旧来の前資本主義的制度のさわめて多数の残存物が保存されている」(『レーニン全集』第六巻折込の『研究のしおり』第六集一二頁)と述べている。レーニンにとっては、農奴制度が広汎に残存しているにもかかわらず、それは資本主義的社会構成体のなかの封建遺制Ⅱ部分構成になってしまっていたのである。こうしてロシアの十九世紀末の機械制大工業段階では、機械制大工業したがって資本家と賃労働者とからなる階級構成が経済的に支配的であったが、しかもなお中間的・過渡的諸段階とくに資本主義的両極分解をとげつつある膨大な農民大衆が封建遺制のもとにくるしんでいたのである。『発展』は機械制大工業ばかりであく、『資本論』の発展理論が捨象した部分構成をも復元したのである。ここでは、資本家階級と労働者階級との資本主義的対立が基本矛盾である——それは

機械制大産業における明確化した矛盾から兩極分化をとげつつある農民大衆における萌芽的な矛盾まである。そして資本主義的な分解をとげつつある農民大衆の封建的土地所有に対する対立が從属矛盾となってくる。封建的土地所有に対する農民の闘争はここではプロレタリアートのブルジョアジーに対する闘争の一環としてとらえられることになる。レーニンの有名な労農独裁論はこのうえにきざずかっている(堀江英一編『市民革命の理論』第七章参照)。

第三節 機械制大工業の二つの發展段階

一 イギリスで産業革命が十八世紀の最後の三分の一期にはじまって、機械に立脚する産業資本が社会的生活の大部分を支配し、資本主義的社会構成体が成立して以来、二〇〇年ちかくになる。その間、社会主義的社会構成体にかわつた国々を除いては、大部分の国は機械制大産業に立脚する資本主義的社会構成体をつづけてきた。資本主義的生産力は發展し相对的剰余価値は増加し、それとともに資本の有機的構成はたかまり生産手段生産部門の比重は非常にたかまつてきたが、それにもかかわらずこうした資本主義經濟の發展が機械制大工業の基礎のうえてその原則にもとづいて行われたことにはかわりはない。産業資本主義と独占資本主義、また自由主義と帝國主義はおなじ機械制大工業段階または資本主義的社会構成体の二つの發展段階である。だから、『資本論』の構造理論はおなじくこれらの二つの發展段階にあてはまる。だが、いままでの小營業段階・マニファクチュア段階・機械制大工業段階といった区分の基準は剰余価値の生産とくに『資本論』第一部の『第四篇 相对的剰余価値の生産』であった。産業資本主義から独占資本主義への發展が機械制大工業という相对的剰余価値のおなじ生産方法の基礎のうへの發展であるとするれば、この二つの發展段階を区別する基準は相对的剰余価値の生産ではなく、それより具体的な概念

でなければならぬ。

独占資本主義を産業資本主義から区別する基礎的な契機は資本主義的独占の形成であり、レーニンもその『帝國主義論』を『生産の集積と独占』（第一章）からはじめてゐる。ところで、この資本主義的独占の形成——『生産の集積と独占』は、剰余価値の生産に関する概念ではなくて、『資本論』第一部『第七篇 資本の蓄積過程』の『第二章 資本制の蓄積の一般的法則』のなかの『第二節 蓄積とそれに伴う集積との進行中における可變資本部分の相對的減少』のところで説明されている。そこでは、『第四篇 相對的剰余価値の生産』という概念は直接的再生産過程における資本の有機的高度化という概念にまで具体化され、そのもとでの擴張再生産過程と関連して資本の集積・集中と独占とが説明されている。だから独占資本主義を産業資本主義から区別する基礎的な契機である独占の形成は、『相對的剰余価値の生産』に属する機械制大工業より更に具体的な概念である『資本の蓄積過程』から説明されている。

『資本論』は、『資本の蓄積過程』のなかで、独占形成の必然性を理論化したか、しかもそれは当時の現實を土台として産業資本相互間の自由競争を前提として理論を構成していった——平均利潤と生産價格・そのうゑにきずかれてゐる商業利潤と利子と地代・資本主義的階級編制。『資本論』は産業資本主義の構造型論であり、『発展』は産業資本主義段階のロシア經濟の具体的な經濟構造をあきらかにしているのである。

レーニンの『帝國主義論』は『資本論』とかなりちがった構成をしめしている。『資本論』のなかでそれへの傾向として説明されている『資本の集積と独占』が、『帝國主義論』では二〇世紀以後の資本主義經濟の現實的土台に据えられ、その基礎のうゑに銀行・資本の輸出……といった順序で新しい要因が導入されて、独占資本主義すな

わち「帝國主義の經濟的本質」がきらかにされている。だから、それは独占資本主義をその最も本質的・一般的な特徴から具體的な特徴へと具體的に規定してゆくという構成をとっている。その意味では、『帝國主義論』は独占資本主義の構造理論である。『資本論』の研究方法にしたがって、もしわたしたちが独占資本主義から独占を抽象するならば、そこには産業資本主義が抽象され、そのかぎりて『資本論』の理論がそのまま妥当するであろう。

同じことを抽象から具体へという叙述方法からいえば、『資本論』の理論に独占・銀行・資本輸出という新しい要因を導入して理論化すれば、独占資本主義の構造理論ができる。その意味では、『資本論』は、あたかも価値理論が剰余価値理論などの基礎理論であるのと同じく、『帝國主義論』の基礎理論であるとともに、独占資本主義段階にささだつ産業資本主義段階の構造理論でもありうるのである。だが、レーニンは『資本論』を前提し、そのうえに新しい要因を導入すればよかったのである。

二 『帝國主義論』のこうした構造理論としての性格からして、『帝國主義論』は二〇世紀以降の經濟的變化のなかから帝國主義を抽象して研究した「波頭の理論」であった——レーニンは一九一九年の『党綱領にかんする報告』のなかで「帝國主義は資本主義の上部構造である」(『レーニン二卷選集』第一〇分冊一九五頁)といったが、『帝國主義論』はこの「資本主義の上部構造」——独占資本だけをとりあつかっている。『帝國主義論』は資本主義の「下部構造」——一般資本主義をあきらかにしていない。しかも独占資本主義または帝國主義の段階の經濟構造はこの「上部構造」と「下部構造」との複合体である。

レーニンはさきの『報告』のなかで帝國主義段階の經濟構造を帝國主義だけに単純化しようとしたブハーリンに反対して、「帝國主義は資本主義の上部構造であり、実践的課題の解決にはこの「下部構造」の問題が重要であ

ることを指摘した。独占資本の形成は平均利潤法則を^{ニミヤナ}変容して、産業資本主義段階の「総資本」を、独占利潤をうる独占資本と平均利潤さえ得られない中小資本とに分裂させる。こうしてこれまでの中間的・過渡的諸段階にあたらしく中小資本までが参加してくる。独占資本主義段階における独占資本―「上部構造」と「下部構造」の内容の変化―収奪者と被収奪者との内容の変化が、プロレタリアート指導の全「下部構造」の統一戦線による反独占闘争の経済的基盤なのである。ここから一九三五年の人民戦線戦術から発展する人民民主主義革命理論が形成されてくる（堀江英一「編『市民革命の理論』第七章参照」）。

わたしたちはいままで発展段階理論をあまりにも単純に理解しすぎていた。発展段階理論を一つの発展段階を構成する多様な経済的構成要素の重層性の理論に発展させ、一つの発展段階をいくつかの段階の統一たる「構造」の理論に発展させることが必要である。複雑な上部構造を理解できる経済理論は、再生産表式を模した「構造」の理論でなく、多様性の統一を内容とした「構造」の理論でなければならぬ。ここでのわたしの仕事は、抽象的な発展段階理論をそれぞれの段階の「構造」の理論に発展させる方法をあきらかにするための一つの例証を提供することであつた。